住職法話「川の流れのように」／美空ひばりさんを偲び

今年はお正月の時に個人的に思い出深い曲として坂本九さんの「上を向いて歩こう」を取り上げました。実はその時からどこかでもう一つ私が好きな曲である美空ひばりさんの「川の流れのように」を取り上げたいという想いがありました。

恐らく皆様も好きであろうこの曲や美空ひばりさん自身に対する印象は世代によって大分違うのではないかと思います。私みたいに昭和の終わりの方に生まれた人間ですとまだ小さい頃の曲なのでそこまで発売当時はわかっていなかったのですが、昭和歌謡や歌い継ぎたい曲としてテレビで紹介されたときに良い曲だなと思って好きになった形だと思います。

私よりもう少し上の世代の方ですと昭和を代表する歌手である美空ひばりさんが平成元年に発売し、新しい時代になって最後に遺した曲ということで感慨深い方もいるのではないでしょうか。

そして更に上の世代、戦中戦後をしっている世代からすると幼い美空ひばりさんが戦後の混乱期にその悲しさを歌った「悲しき口笛」で人気に火が付き、映画や舞台で大きく活躍し、戦後日本の象徴として「共に歩んできた」という想いが強いのではないでしょうか。

52歳でお亡くなりになったのですが8歳からと活躍が早かった為、長きに渡り活躍をしてきた方だと思います。そして長く活躍した分、色々なことがあった方だと思います。ご存じの方も多いでしょうが少し振り返っていきたいと思います。

美空ひばりさんは神奈川県に加藤家の娘として生まれ、幼いころから歌が得意でデビュー前から父が戦争で出兵する際には歌を送り、それが評判を呼んで戦中も慰問活動をされていたそうです。その後自身も度重なる空襲などを生き抜き、終戦を迎えます。そして皆が娯楽に飢えていたこともあり、戦後一か月後にはすでに町内でバンドを組み、その翌年には8歳で杉田劇場に立ったということですからその情熱は素晴らしいです。ただ、その後すんなり活躍するという形にはいかず、幼い子供という目で見られてしまい、マスコミやお父さんの反対などもあって足踏みする時期もあったといいます。それでもお母さんと一緒になってその才能を認めたプロデューサーや雑誌『平凡』（現在：株式会社マガジンハウス）などの力も借りながら徐々に活躍の場を増やしていきます。そして同じような年代でデビューした江利チエミさんや雪村いづみさんと雑誌『平凡』の企画を通じて知り合い、三人娘として映画に共演したり、友人として付き合ったりと公私にわたり、交流を重ねたそうです。映画やステージにと活躍する中でまだ本土に復帰していない沖縄で公演を行い、別の活動の際にはファンから塩酸をかけられてしまうなど様々な体験をしたそうです。その後、俳優・歌手の小林旭さんと結婚。しかし、2年弱ほどで離婚し、借金も背負いました。しかしそれでも東京オリンピックの際には「柔」という曲がヒットし、他にも「真赤な太陽」などいくつもの名曲を出していきます。ただ、オリンピックの際にテレビが普及したことで今まで活動の中心であったステージや映画の製作数が減っていきます。

さらに暴力団全国一斉取締り作戦が始まります。ひばりさんは戦後の混乱期の中、デビュー当時から神戸芸能社（山口組）の後援を受けていました。一部地域では興行権を独占していたり、ボディーガードも兼ねていたので当時は必要だったのでしょう。しかし、時代の流れや弟さんが不祥事を起こしたことで公共施設や紅白歌合戦への出演ができなくなるなど締め出されてしまいます。それからは数々のバッシングを受ける苦難の時期が続きますが、広島平和音楽祭で歌った「一本の鉛筆」や歌と芝居を行う舞台での活動を続け、弟の子供を一人養子に迎え母親としても日々を過ごしていきます。そして44歳の時にずっと一緒に芸能活動をやってきた母：喜美枝さんが亡くなり、相次いで友人の江利チエミさんや弟2人を含めた親しい方が亡くなります。そういった悲しい時期を乗り越えた先に、元々は味の素のCMとして名曲「愛燦燦」に出会い久しぶりに大ヒットします。ただ、この時49歳で徐々に体調を崩していたといわれ百日間ほど入院をしています。退院後も「みだれ髪」などのヒットに恵まれますが、やはり病を押しての公演だったそうです。そして51歳の時に、今でも活躍している秋元康さんらと組んで「不死鳥パート2」というアルバムで10曲ほどの曲を作ります。その中の一つが「川の流れのように」です。この曲には逸話があります。元々は新しい世代に向けてというテーマで作られたアルバムで、その中からシングルとして発売されるのは「ハハハ」というポップス調のものでした。それに向けて宣伝や制作も動き始めていたそうです。しかし、ひばりさんもこの時はどうしても「川の流れのように」を発売したいと自分の意思を貫いたそうです。その想いの深さを表すエピソードの一つとして、曲のデモテープを聞いたときに息子さんにこんな言葉を口にされていたそうです。「まるで、私の人生そのものを歌わせてもらえるような楽曲ね」と。この曲を歌うとき、ひばりさんは万感の思いや魂を込めて歌っていたのでしょう。この発売の半年後、ひばりさんは亡くなります。

なぜここまで美空ひばりさんを紹介したかというと簡易的ですがどんな背景や想いがあったのかを振り返る為とひばりさんが仏教の、日蓮宗の信者だからです。実家の加藤家のお墓は横浜の日野公園墓地にあります。その近くにあるお寺が加藤家の菩提寺である唱導寺です。そしてひばりさんは良くご両親の供養をしたそうです。それは仏教を信じ家族らのご冥福を願っていたからでしょう。仏教は年や苦労を重ねる程、共感できることが多くなる教えだと個人的には思っています。ひばりさんが自身の人生を重ねた「川の流れのように」も仏教で説かれる人生観（生きる難しさや変わりゆく無常観など）に通じる歌詞でした。

今、統一教会問題や宗教離れということで仏教は軽視、ひどい時には問題視されます。しかしその内容、本当はどうなんでしょうか。価値の無い内容だとしたらお釈迦様以来、数千年語り継がれ、美空ひばりさんなどの人物が信じることなど無いと思っています。

お盆という時期にもう一度皆様が供養や仏教に向き合うきっかけにして下さればという想いで今回はこの話をしました。ぜひ「川の流れのように」やお経を聞くときに前述の内容を意識してみてください。込められているものを理解すると聞こえ方が変わるかもしれません。